

青春興亡の百年・応援団概史（前編）

谷口哲也（昭和48年入寮）

北海道大学における応援団の沿革をまとめたものは、昭和五十三年七月発行「応援團史」（発行者・北海道大学応援団、編纂者・谷口哲也）のみである。これは、札幌農学校の遊戯会における応援団を前史とする北海道帝国大学豫科応援団の発祥から終焉までを前編、昭和五十一年までの新制北海道大学応援団活動を後編として編纂されている。

この度の執筆にあたっては、この沿革史を要約し、さらに昭和五十二年以降の変遷については取材が不充分ではあるが、筆者なりの概観を述べさせていたきたい。

北海道帝国大学豫科応援団史

第一章 前史 遊戯会豫科応援団

遊戯会

明治十一年に、学生の体格を強壮にし活発の気風を発達させる目的で遊戯会が創立された。遊戯会とは「アスレチックミートイング」の訳語であり、スポーツ競技のほかに芋拾いや豚追い、綱引き仮装行列等の愉快な種目も含まれる所謂運動会であった。

娯楽の少ない当時の札幌では、多くの観客を集める一大祭典でもあった。遊戯会は、既に北海道帝国大学となっていた大正十一年に廃止されるまでの四十五年間、学生の体育向上に寄与するとともに、学内に活気を与える年中行事として重きをなした。

遊戯会は、各科対抗で行なわれた。各科とは、農学校時代と大学時代では多少名称が異なるが、現在の学部に相当する本科、旧教養部に相当する豫科（豫修科）そして付属学校に相当する農学実科、林学実科、土木工科、水産科である。

各科応援団

各科は、代表選手に対して激烈な応援を繰り広げた。ここに、各科ごとの応援団が誕生することとなったが、それは自然発生的なものに過ぎず、有志が応援リーダーを自称して応援指揮を行なったようである。

これらの応援団の正確な結成時期は特定できないが、文献で確認できる最古のものとしては、明治四十一年に行なわれた第二十六回遊戯会における各科の応援りである。

各科選手競争、本日随一の呼物、楽隊付きの豫修科の応援隊、場を巡りて示威運動頗る勉む、銅鑼打ち叩く水産の野次隊、喧嘩腰なる實科の応援、眼の及ぶ所白旗 躍り紅旗翻る：「フレ豫科フレ豫科」の歓声遠く暮霞に高し：：：。

（文武会々報第五十五号より）

遊戯会における応援の様子を、豫科を中心として次に紹介する。

各科の彌次振り―豫科は白旗に白鉢巻、別にこれといふ設備はなかったが、金原楽長の率ある楽隊、赤木庄司両君の率ある彌次隊、応援歌を歌って盛んに野次った、翌日碌に声も出なかったのを見ても、如何に獐猛に彌次ったかが知れる：・

白が一着で決勝戦に入るや、白軍健児は狂せん計りに喜んだ、喫茶亭の珍時計は乱打され、聲援歌は彼等の聲を最早出ぬ計りにさせた。藻岩山も或は震動したる

う、優勝旗の歌に曰く、

勝利は續く豫科の軍

中堅男子と仰がれて

榆梢上輝く星に

光は増せり優勝旗

（明治四十二年・第二十七回遊戯会・文武会々報第五十七号より）

戦機は愈々熟した各科のスタンドは此處を先途と野次る、もう斯うなると皆夢中だ、また夢中にならない方がどうかして居るのだ、全く修羅の巷の様な騒ぎである、午後五時四十分各科の選手は十人宛の團體に送られて各応援團の声を背後に受け流して悠々と場内に入り来る、野次の野次は益々猛烈になる、十人宛の團體が選手を囲んで夫れ夫れ三度応援歌を歌ひ涙の出る程熱心に応援してスタンドに帰る。選手はスタートに並ぶ：・

（明治四十五年・第三十回遊戯会・文武会々報第六十六号より）

当時の応援は野次中心であつたため、応援団が「野次隊」、「彌次團」と呼ばれているのは仲々面白い。

なお前掲の文武会々報にあるように、明治四十五年に至って初めて「応援團」という名称が初見される。

「都ぞ弥生」が生まれ、後述する小樽高商戦が開始された明治四十五年を北大応援団の発祥の年とする近年の考え方も、蓋し根拠無きものとは言えないであろう。

高商戦開始と応援



遊戯会の各科対抗綱引

明治四十五年五月二十五日、農科大学グラウンド（現在の総合博物館の位置）において、前年に開校したばかりの小樽高等商業学校との野球戦が行なわれた。これが、その後連綿として行なわれた高商戦・商大戦の始まりである。

小樽高商の学生による応援が行なわれたことは、「野球部史」の次の一文からも分かる。

斯くの如くして零對廿一Aの大勝利となりき。高商の応援歌と我等のフレフレにて此の大活動は終結となりぬ。

当時は各運動部の豫科チームが独立しておらず、豫科生徒と本科学生合同の全学チームよって野球戦は行なわれたが、応援の方は、遊戯会の場合にもそうであったように、断然ファイト溢れる豫科生徒が中心であったと思われる。野球戦の応援は回を重ねる毎に盛大になっていったようであり、その様子を野球部史から拾ってみよう。

朝来暗雲低迷するも絶好の日和なり。吉井博士の廿五年式を終へて白旗を手にする応援團は一塁側に陣取りエールを称へり。

（第四回・大正二年十月十七日）

赤い應援旗を持った高商の應援隊は「フレ―フレ―農大」を叫んでくれた後、エールを唱って味方を励ます。

（第五回・大正三年十月十七日）

五日は照らず風なく絶好の野球日和、此の日小樽高商全校三百の應援隊を提げ、赤旗を翻し太鼓石油罐を打叩き聲も囁れよと應援歌を絶唱すれば、北大應援團三百白旗を翳して相應じて之に當り光景真に凄惨、觀衆約五千、北大教授並に高商教授数人両側に對峙して戦況を氣遣ふ。

（第十三回・大正八年十月五日）

豫科運動部の独立と気質の変化

大正七年三月、多年の宿願成って農科大学は北海道帝国大学に昇格し、同時に従来の農学部に加えて医学部、工学部が新設されることとなった。

それに伴い豫科生徒数も激増し、大正十年には全豫科生は六百人となる。この頃から豫科自立の気風が著しくなり、大正十一年には、それまで本科生も入寮していた恵迪寮は豫科生のみのものであった。

各運動部においては、続々と豫科生チームが独立し、豫科の校友会である桜星会のもとに北大豫科桜星会運動部を結成した。その頃桜星会に属した運動部は、野球部、庭球部、陸上運動部、水泳部、柔道部、剣道部、弓道部、角力部の諸部であり、これらの桜星会運動部が高商戦にあたることになった。帝大昇格、豫科自立の気風等に伴い、この頃から豫科生の気質にも変化が生じてきた。

農科大学時代は、札幌農学校時代の気風を色濃く継承した「惇朴質素」の気質であったが、この頃から豫科の気質は徐々に他の旧制高等学校に近いものになってきた。

すなわち、大自然との対話による思索と労働を重視するピューリタニズム的なものから、寮歌とストームに象徴される青春の疾風怒濤を重視する気質へと移っていた。そして、大正末年頃には、長髪長髯、弊衣破帽を誇る豪傑風の人物が少なくなかった。

遊戯会の廃止

札幌農学校開校間もない明治十一年以来、学生生活に活気を与え、更には札幌の一大行事として親しまれてきた遊戯会は、大正十一年の第三十九回を以って廃止された。その理由は、わが国における運動競技の隆興に伴い、遊戯会も、よりスポーツ的にすべきだということと、遊戯会自体が札幌の春の行事として年々盛大になるに従って贅沢華美に流れるようになったことである。

ともあれ、遊戯会の廃止により、各科応援団は消滅することとなった。遊戯会豫科応援団もこの年を以って解散するが、高商戦の応援を行うなど、引き続きいて高商戦応援を目的として結成される北海道帝国大学豫科応援団の先駆的役割を果たしたのであった。

第二章 第1期 大正十一年から大正十五年まで

概観

遊戯会が廃止され遊戯会豫科応援団も自然消滅した大正十一年、早くも同年中に高商戦応援を目的とする北海道帝国大学豫科応援団が創設された。これは遊戯会豫科応援団と同様に有志幹部役員によるものであったが、活動面・精神面・財政面等において年々拡充し、昭和二年の団則設置による公式機関化を迎えることになる。

豫科応援団の創設

大正十二年三月十五日発行の桜星会雑誌第五号に「應援團報告」が掲載されている。創設当時の様子を知ることが出来る貴重な一文であるので、その全文を引用掲載する。

呱呱の聲を挙げて未だ一年しかたたない我團は未だ凡てが完全になつて居ない。

然し此の年もこれで終つたかと思ふとなんとなく重荷を下した感じがすると同時に何處ともなく責任を全うし得たかといふ不安におそはれる。

実に我團の活動期は短く泡ただしもので突然来て突然消えて行く感じがした。

然しこの忙しい期間にもその充分なる働をなし得我團の意気を示すことが出来たのもこれ皆團員諸兄の努力の結晶に外ならなかつたと思ひ感謝



昭和十一年度応援団幹部

し居る次第である。今年中に於ける我團は團員も百名以上増し旗も三百本整へ太鼓も多く借り入れて大いに優勢となつた。春の高商との應援は雨で1週間も延びてあらゆる方面に随分手数がかつたが青春の血に燃ゆる團員は大いに應援されて敵の勢を挫くことを得て手稲山に夕日の隠れるとき市中に凱歌を歌ふことが出来たのは誠に愉快であつた。然し秋は庭球は小樽、野幌であつた為勢力を二分しなければならなくなつてその意気も春程度にはないだらうと思つて居た所野球の方の應援は充分敵を苦しますことが出来、庭球の方には於いては太鼓を打たないのと敵地に行った為、どうも気抜けがした感があつたがそれでも我戦士を後援して大勝を得しめ小樽のごたごたした狭苦しい町を壓倒したのは氣持がよかつた。ただ軍隊との角力の時は應援團の役員の手廻しの遅かつた為充分應援することが出来なかつたのは如何にも残念であつた。

これで我團はすべきことは充分なしたのだ。唯太鼓が借りものばかりであること
が實に不便で又面倒なことでもどうしても團所有の太鼓がなくてはならない来年は是非買入りたいと希望している。
秋には團員諸兄より無理に二十錢づつ寄附していただいて遠征費に当てたことは

種々の事情及び費用の關係上止むなきに至った次第故御了承を乞ふ。

次に本年の収入費用を決算致します。

収入ノ部

一金百六圓六十錢也 桜星会ヨリ

一金十九圓五十錢也 特別費トシテ寄附

一金八十四圓二十錢也 團員ヨリノ総収入

計二百拾圓三十錢也

支出ノ部

一金八十七圓二十三錢也 小旗、大旗、竿代其他

一金十九圓五十錢也 太鼓修繕費

一金四十六圓也 太鼓謝礼

一金五十八圓八十八錢也 七十五人分小樽往復汽車賃

計二百九圓六十一錢也

差引残金六十九錢也

以上の内容から次のことが推測される。

一、応援団が結成されたのは大正十一年春であること。

二、結成された応援団の幹部役員並びにリーダーが有志であることは勿論のこと、団員も豫科生の内の有志であったこと。

団員から二十錢ずつ寄附してもらった収入額から推定すると420名程度となるが、当時の全豫科生数が七百名であるので、六割が応援団員ということになる。

当時は全てがのんびりとしていたらしく、団員・非団員の区別も判然としておらず、団員といっても精々「応援団費（寄附）を納入している者」という程度ではなかったのか。

三、軍隊との角力試合の応援など、高商戦以外の試合の応援も行っていたこと。

四、有志の団体ながら、校友会である桜星会から多額の援助金を受けている

こと。

この援助金額は全入学の約五割を占めている。
以上のように、創設時の豫科応援団は精神面においても組織面においても非常にラフなものであったが、その後数年の間に急速な拡充を遂げるのである。

精神面・組織面の拡充

創設当時の応援団は、それ程権威を振るうこともなく組織として統制を強いることもなかった。また、豫科生の方でも敢えて応援団として一定の固定した組織集団の結束行動等は考えていなかったようである。試合の毎に豫科生の中の熱血漢が自発的に個々に集まってきて応援に血道をあげるというような、豫科生各自の情熱による所が大であったが、序々に応援団における豫科生的一致団結を目指す理念が現れてきていたようである。

創設から2年後の大正十三年三月十五日発行の桜星会雑誌第七号に「応援団の事報」と題する一文が掲載されている。その要旨は、豫科スピリットの高揚の為に「我が團の一人として全校一致の行動をとる権利と義務とを有する」豫科生は、北大豫科応援団の名の下に団結し、母校の名誉を賭して競う選手と一心団体となって応援しなければならないということである。ここに現れてきている理念は、後の「団則」制定による豫科全学応援団の結成の素地ともいえよう。

創設当時の応援団の組織は明確なものではなく、大抵の場合は前団長が後継の団長を推し、新団長の下に有志がブレインとして幹部役員となったようである。新幹部役員が豫科全学に公表されることもなかったらしい。

団員も又その範疇が明確ではないが、資料から推測できる団員数は、大正十一年の四百二十名（全豫科生七百名の約六割）から、大正十三年には七百七名（全豫科生九百四名の約八割）と人数でも割合でも拡大している。

財政面においても毎年拡充しており、団員数及び徴収額は不明であるが、記録に残っている毎年度の会計報告における団員から徴収

した団費の合計額が、大正十一年度・八十四円二十銭、大正十二年度・百十二円九十銭、大正十三年度・四百二十八円四十銭と増加している。

さて、豫科応援団は年々拡充を遂げ、大正末年頃には、かなりまとまった形になっていったようである。大正十四年度の幹部役員、並びにリーダーの構成は次の通りである。

団長 泉 由松（英農）

副団長 鳥羽信次（工）

田島多門（独農）	河合九洲男（独農）	竹内義雄（工）	太鼓係長	北島正元（工）	桜庭五郎（独農）	宮下利三（英農）	警備係長	松岡幸七（医）	副係長	松本迪之（独農）	安保常次（英農）	井上 實（英農）	上野衛一（英農）	常松 栄（英農）	牧野克己（英農）	野間口英喜（工）	会 計
----------	-----------	---------	------	---------	----------	----------	------	---------	-----	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----



高商戦応援風景（現在の理学部の場所）

以上十六名の幹部、各クラスよりリーダー一名、太鼓係一名づつを撰出せしめたのでその合計四十八名を加ふれば総計六十四名の人数を揃へて居た。

豫科の気質とエピソード

大正の中頃より主流となつてきたバンカラ気質はますます強くなり、この頃になると弊衣破帽、奇行蛮行を誇る豪傑肌の猛者が多数輩出した。

大正十四年応援団長泉由松氏は泉脅（きょう）と自称する暴れん坊であつた。また、当時の応援団の幹部役員は柔道部員などの熱血漢が多く、様々なエピソードを有する人物が多いが、何といつても一代の傑物である鳥羽信次氏の右に出る者はいないと思われる。

鳥羽氏は強い正義感を持つ人物であるが、その喧嘩振りは仲々凄まじいものであったらしい。昔の札幌には街の辻々に手押しポンプがあり、冬の寒さで鑄物のポンプの柄が折れやすくなっている時は、それをへし折つて喧嘩に使つたそうである。また当時の札幌には客をいかかわしい場所へ連れて行く人力車夫がいたそうで、どういう訳か鳥羽氏は車夫達から親分として崇められ、地廻りのヤクザといざこざが起けると腕力にもものをいわせて仲裁に入つたという伝説的エピソードも残っている。鳥羽氏の正義感と腕力は大いに札幌の遊侠の徒の心胆を寒からしめたく、鳥羽氏が卒業され北海道から離れられた際、氏が青函連絡船に乗り込んだことを確かめた函館の親分から札幌の親分へ「トバ、ツガルヲワタル」という電報が打たれ、親分子分一同は安堵の胸を撫で下ろしたとのことである。

また、鳥羽氏が昭和四年度の応援団長に選出された際には、北海道帝国大

学新聞（昭和四年三月四日付け・第三十八号）に「返り咲いた豫科の花形、鳥羽信次君豫科応援団長となる」という見出しの次の記事が掲載された。

嘗て豫科に在って應援團副団長を務め、驍名を学園の内外に馳せて居た鳥羽信次君が兵役等の為め暫く離れてゐた学園へ舞ひもどつて来て、今度は豫科の花形應援團長として全豫科の信望を一身に集めて選挙された。鳥羽君の熱と意気とは彼が学園を離れてゐた時でも学内にある者に許されて居た程であつた。先團長前田登君の後を承けて彼の新たに得た沈勇と過去の経験とを以て、應援團長の職責を遺憾なく務め、半ば廃頽せんとして居る豫科の意気を充分恢復し發揮して行くものと期待されている。

以上のように、鳥羽信次氏は名団長としてもその名を止めている。尚、鳥羽氏は昭和八年に工学部鉾山学科を卒業後満州に渡り、満州奥地で多数の部下を擁して金鉾脈等の地下資源の探索にたずさわり、あたかも馬賊の大頭目のような格好で活躍していたが、残念ながら病を得、広野の果てに骨を埋めたということである。

さて大正末期はバンカラ気風の最盛期ともいえる時期であり、幾多の快男児を輩出したが、一方バンカラ気風の強盛は放縦に偏する悪弊をも生じ、豫科生の風紀も乱れがちであり、また恵迪寮においては自治制の混迷を招くに至った時期でもあった。

第三章 第二期 昭和二年から昭和十一年まで

概観

昭和二年に「団則」が制定され、ここに全豫科生を団員とする公式機関たる北海道帝国大学豫科応援団が結成された。豫科応援団は桜星会の院外団として目覚ましい発展を遂げることとなる。すなわち、応援団が豫科のバックボーンとして或いは豫科スピリットの揺籃として重要性を獲得していく時期である。

しかし、それに伴い校友会である桜星会の関係が問題化し、遂に昭和十二年一月、それまでの独立した院外団から桜星会の外局的機関として一元化されるに至るのである。

「団則」の設置

当時団則の制定にご尽力なさった稲垣是成氏（昭和二年医類副団長）から、昭和五十一年に直接お話を伺う機会があり、その要旨は以下の通りである。

「それまでの応援団幹部役員は、単なる同好の士であった。団長は前団長の指名によって決定され、新団長のもとに幹部が組閣される形であった。豫科全体に対して新団長・幹部を披露することもしなかった。そこで、私（稲垣氏）や中村光慶氏（医類）が中心となり、応援団を全豫科を基盤としたものにするべく、団則を定めることとした。このとき桜星会主事の伊藤俊夫氏（昭和六年農経卒・北大名誉教授）も協力してくれた。全国の旧制高校から応援団に関するアンケートをとって調査し、それを参考にして団則を決定した。しかしながら、団則が決定した時には新年度（昭和二年度）が始まっていたので、伊藤俊夫氏の発案により暫定措置として全豫科級の団長選出は取り止め、各類から三名ずつ選出された計九名の幹部内の互選によって団長を決定することとした。その結果、医類の中村光慶氏が団長に選ばれた。その後、団則通りの運営を確立するべく、昭和三年一月に次期団長の選挙を行った。我々幹部九名が選挙管理委員のような形で行った。二十三人の立候補者が立った。」

さて、以上のような経緯で制定された団則とは如何なる内容のものであったのか。残念ながら、今日では明文化された団則を見ることは出来ないが、その内容は応援団幹部の選出規定が主な内容であったと思われる。すなわち、全豫科生を応援団員となし、応援団長は全豫科生の選挙により立候補者中より選出する。各類（農類・工類・医類）から、それぞれ副団長・庶務・会計の三名を選出し、これら九名と団長の計十名が応援団の執行部である「幹部」である。この選挙は一月に行われ、幹部は全員四月に最上級の三年生になるものでなければならなかった。従って、幹部に選出されても学年末試験で落第すれば、幹部を辞退しなければならなかったようである。

また、各クラスから応援リーダーを一名ずつ選出する。農類と工類は一年三クラス、医類は二クラスであったので、クラスリーダーは計二十四名である。このクラスリーダーは、高商戦応援の時に幹部と共に応援の指揮にあたった。以上が団則の概要である。

桜星会との関係

団則の制定により応援団は全豫科生を基盤とする自治的機関となったが、豫科の校友会である桜星会とは明文化された規約上の関係は一切無かった。しかしながら、応援団は桜星会の院外団とでもいう立場で、桜星会と不即不離の関係を保ち、以って豫科校風の発揚に邁進したのである。

さて、ここで桜星会の沿革について触れてみる。桜星会が創立されたのは

明治四十四年であるが、大正七年頃までは独自の予算も無く、農科大学全学
学友会である文武会へ従属していた時期である。大正八年頃から独自に会費
を徴収するようになり、桜星会各運動部が次々に結成されるのも、この時期
である。

大正九年九月一日より桜星会会則が施行されるに至ったが、第一条に曰く
「目的 本會ハ大学豫科生徒並ニ大学豫科職員ノ懇親團結ヲ圖リ會員ノ意氣
及ヒ校風ヲ維持發揚スルヲ以テ目的トス。」

会運営は各クラスより選出された委員によつて事務処理が行われたが、最
も重要な予算配分は各部の部長（教官）によつて決定されていた。そこで昭
和二年に、前述の伊藤俊夫氏と稲垣是成氏とが中心となり、予算決定に関す
る学生自治の確立を要求したが、豫科当局と鋭く対立することとなった。

結局昭和三年に、総務制が採用され、予算決定に関する学生自治権が認め
られた。総務制とは「各科ヨリ二名ヅツ、第二第三学年生徒ノ中ヨリ選挙シ、
内1名ヲ総務委員長トス」という会則規定により選出された六名の総務委員
が執行部として会務を処理決定する制度である。

すなわち、桜星会が校友会として自治的性格を獲得したのと時機を同じく
して、豫科応援団も全豫科生を基盤とする自治機関としての体制を確立した
のである。前述したように両者は不即不離の関係を以つて校風の維持發揚
に務めた。

尚この頃より、それまで応援団が独自に徴収していた応援団費を桜星会費
に含めて一括徴収することとした。また、昭和三年度より従来桜星会雑誌部
で発行している桜星会雑誌に掲載されていた桜星会各部々報を独立させ、「桜
星会部報」と題する冊子として応援団が編集・発行することとなった。

ちなみに、この頃より、北大豫科応援団を北大豫科桜星会応援団と呼び習
わすようになつたらしい。

しかしながら、両雄並び立たずの諺通り、桜星会院外団たる応援団が運動
部を基盤として権威を高めていく一方、桜星会総務は会の財政を掌握して実
権を拡大していくこととなり、両者の関係の悪化・対立を招くのである。

桜星会総務との対立

応援団活動の中核たる応援団幹部の権威は非常に高いものになり、単なる
競技応援のリーダーではなく豫科スピリットの権化であり豫科生活の旗手で
あると自他共に認める存在であつた。特に、当時は全豫科生の選挙によつて
推戴されるのは応援団長のみであり、応援団長は全豫科生を代表する唯一の
存在としての信頼と権威を得ていたのである。

以上のように、全豫科生の代表者そして桜星会各運動部の擁護者・代弁者

として桜星会に対する発言力を増していった応援団も、組織的にはあくまでも院外団であり、規約上からは桜星会における会運営の最高機関であるべき総務としても、応援団の権威並びに発言力を規制・制約出来なかったわけである。

ここに桜星会は二元化の様相を呈し、応援団と総務との関係は悪化し対立するに至ったのである。

豫科の気質

この時期は日本社会の転機であった。大正デモクラシーの風潮は日本資本主義体制の行き詰まりによって漸次衰退し、替わってファシズムが台頭してくる時期である。一方、社会矛盾を鋭く指摘する社会主義思想やマルキシズムが勃興し、プロレタリア文学運動、労働運動が盛んになる時期でもある。この時代風潮の下で、全国の大学や高等学校でストライキ事件が起こったが、北大における大部分の学生は、かかる社会風潮とは隔絶したような牧歌的雰囲気の中で青春を謳歌していた。

豫科生気質の主流は所謂バンカラであり、旧制高校的弊衣破帽が豫科生の象徴的スタイルとして定着していた。当時のバンカラ気質を評して「デカダン」とする意見もあるようだが、当時の豫科生の多くは学徒としての矜持と誇りを持ち、そのバンカラ気質も決して虚無的でも退廃的でもなかった。

当時の高等学校ではスポーツ熱全盛期であり、北大豫科も例にもれず、運動部での活動と生活は豫科生活の精華であったと言っても過言ではない。当時の恵迪寮は各運動部の合宿所の如き状態になっており、昭和八年三月の調査によると全寮生百八十七名中百四十五名が運動部員であったことが、当時のスポーツ熱全盛を如実に物語っている。

第4章 第三期 昭和十二年から昭和十五年まで

概観

前述したように応援団の権威と発言力が増大した結果、桜星会運営において執行部である総務と対抗的關係を生むに至った。そして、執行部の下に桜星会運営を一元化しようとする総務の提案により、遂に豫科応援団は従来の院外団から桜星会の外局的機関として摂取されることとなった。

しかしながら、桜星会総務は応援団活動を実際規制出来ず、応援団活動はそれまでと同じように発展の一途を辿った。だが、この時期は日中戦争の勃発など日本が軍国主義へと暴走する時代であり、学生生活に対しても断髪令など種々の圧力が加えられたのであった。

そして、遂に昭和十六年には文武会並びに桜星会の報国会への改編により、伝統ある豫科応援団は解散廃止されるに至った。

桜星会への編入

応援団と総務の拮抗による桜星会二元化の解決として、応援団を桜星会に規約上編入し、以って応援団活動を制限しようとする桜星会総務は、応援団幹部に対して応援団の桜星会への編入を提案した。これに対して応援団幹部が強く反対したのは当然であった。

しかし、如何なる交渉過程が展開されたかは明らかではないが、結局昭和十二年一月の桜星会々則の改正により応援団は桜星会の外局的機関として編入されることとなった。

改正された会則の中から応援団に関する条項を挙げると、まず第三条に「本會ハ第1條ノ目的ヲ達センガ為メ應援團並びニ左ノ諸部ヲ置ク（以下略）」とある。

次に第五条の役員の条項に、会長、副会長、参事、理事、部長、會計主任（以上教官）、総務委員、会務委員、各部委員（以上生徒）の諸役員と並んで、応援団顧問、応援団団長が役員として列挙されている。具体的には、

一、應援團顧問一名特別會員ヨリ會長之ヲ囑託ス

一、應援團團長一名各部委員ノ推薦シタル候補者中ヨリ全會員ノ選挙ニヨリ決定スとしてある。

そして「第六條 本會役員ノ任務左ノ如シ」として「應援團顧問ハ應援團ノ機務ニ參與ス」「應援團團長ハ團務ヲ處理ス」と定められている。さらに附則として「本會應援團々則ハ別ニ之ヲ定メ會長ノ認可ヲ受クルモノトス」と定められている。

また桜星会運営に関しては、応援団顧問並びに応援団長は役員の一員として「役員会」に出席して「規約ノ改正」「其他重要ナリト認ムル事項」についての協議を行うことと、各部の予算請求書を各部委員が説明する「予算説明会」に総務委員、会務委員と共に応援団長が出席することが定められている。

なお桜星会運営に関する主要な事柄は、参事、理事、総務委員、会務委員によって構成される「協議会」で決定され、「役員会」は会長並びに総務委員が必要と認めた時のみ召集されるにすぎなかった。

以上の会則を見てみるならば、桜星会総務の提案した応援団編入が何を意図していたかは明白であろう。すなわち、桜星会院外団として治外法権的立



剣道野試合

場から桜星会運営に対して隠然たる影響力を有していた応援団を会運営の中
枢から遠ざけ、応援団長を恰も一運動部の主将であるが如き扱いにして、そ
の権威と声望を否定せんとしたのである。

この制限は予算面においても明白であり、昭和十一年の応援団予算が八百
三十二円九十六銭であるのに対し、昭和十二年には五百七円八十六銭となり、
これ以降、応援団予算は四百円〜五百円程度となるのである。

以上の桜星会編入の結果については、当事者である桜星会総務委員長自ら
が文中に述べているので、次に引用する。

斯くして昭和十二年一月遂に應援團は桜星會に編入されることになり、
會の一元化は完了し総務は名實共に會務の運用が出来るといふ様になっ
たのである。

会則の合理化の實現である。今年度総務はこの基礎の上に出発した。即
ち桜星會の内部的矛盾の大きな部分が除去されたといふ假定の上に立つ
たものである。然るに私達総務が仕事を始めた當初に起った頭髮整理の
問題は全然除外して考へても、私達の計畫した重要な事項が次々と難関
に打突からねばならなかったのである。

是に於いて斯る不幸な現象が何故連続的に生起ねばならぬのであるかの
疑問が提出される。Bの解決（註・Bとは応援団と総務との対立関係
のこと）は會の特種性を無視して純然たる政治機構と假定した場合に
のみその合理性、進歩性が主張されるのであって、結局現實の會機構の
矛盾の除去に對しては本質的な作用を為し得ないといふことが明かにな
ったのである。

（昭和十二年度「桜星会会報二」所収、総務委員長「桜星会の歩み」よ
り抜粋）

応援団活動と豫科の氣質

以上のように、規則上、組織上で応援団は桜星会に編入されたが、實際
には桜星会総務が目指した「矛盾の除去」は何の解決もされなかったし、
応援団の活動は微動だにしなかった。

事実応援団活動は、それ以前の時期から引き続いて年々発展し、この時
期にはまさしく全盛期の觀を呈するに至っている。

詳細な叙述は割愛するが、三月の受験生の運動部勧誘から始まり、六月
の高商戦、七月のインターハイ遠征応援、九月の高商戦、そして冬のイン
ターハイ遠征応援という年間の活動は毎年盛大に行われた。

特に高商戦は興隆の一途を辿っており、特に野球戦は全道の人気を集め
ていた。その人気の理由は、当時の高等学校スポーツ独特の熱のこもった

力一杯のプレーにあると同時に、対校戦特有の熱気とその発露である華やかな応援合戦にあった。

ところで、この時期は概して北大豫科は弱かったそうである。従って高商戦全勝優勝の機会には恵まれなかった。昭和十五年に久しぶりに全勝優勝を成し遂げた時は、中央講堂で全勝優勝祝賀会を開催して大いに祝ったとのことである。

さて、昭和十一年に二・二六事件が起き、翌十二年七月には日中戦争の始まりとなる日華事変が勃発した。これを機に日本はファシズム・軍国主義の道を破滅へ向かって一気に転落していくのである。

魔手は教育にも及び、事変勃発と同時に開催された全国高等学校長会議は「国体観念の明徴を期す」ことを教育方針に定めた。また、「断髪令」なるものが出され、長髪は自由主義的であるとされて半強制的に断髪を迫られた。同年十二月秋には豫科に報国会なるものが結成され、学内でも国防献金が行われ、北大皇軍慰問連盟が誕生した。

昭和十三年には国家総動員法が制定され、戦時色が一層濃くなったのである。更に十四年に入ると戦時体制は本格的となり、本科の軍事教練も必須科目となった。

元来北大は中央から遠く離れ、また理科系大学であった為に、良しにつけ悪しきにつけ社会の動きに対して疎かったとされているが次々と押し寄せる時局の波には如何ともし難く、思想・行動面で種々の制約が加えられた。

しかし豫科の気質を見てみると、この当時は未だ楽天的な要素が強いようである。つまり、拡大していく戦争に対しても、それを観念的に試練の時であると考えてるが、自己と直接関係ある事実として把握することは稀薄であったようである。ともあれ、重苦しい空気が確実に濃くなっていったのは事実である。

解散廃止

昭和十五年には、既に米英との戦争は必然的な状態となってきた。新体制運動の下に、進歩的なものは勿論のこと、自主的・自治的なものまでが否定され、全てが国家の統制下に組み入れられていった。北大においても学園新体制の名の下に全ての自主的・自治的なものは解散廃止され、戦争遂行の為の統制機関である全学学徒報国会が結成されることになった。すなわち、輝かしい伝統を誇る文武会そして豫科の校友会たる桜星会は解散し、桜星会は全学学徒報国会の下部組織に過ぎない桜星報国会に改編されることになった。

昭和十五年秋から、翌十六年春の結成を目指して桜星報国会の組織が検討された。応援団長であった星野力氏や、次期幹部候補として応援団幹部と行動を共にしてきた二年生の崎浦誠治氏等は、何とかして応援団を存続させたいとして、豫科当局との対立も辞さない努力をした。しかし時局下において、保守的ではあったが豫科生の自主と自治と自由を標榜する豫科応援団の容れられる余地は最早なかったのである。

遂に伝統ある北海道帝国大学豫科応援団は昭和十五年を最後として解散廃止されることとなった。解散に際し、星野団長は「解散に就いて」と題して次のように述べている。

去る四月光輝と傳統に輝く北大豫科應援團長の重責をうけてより早くも半年を過しました。

不肖浅学にして果して先輩諸兄の残されし業績を守り得るや否やを危んだ次第であります。

而し幸にも先輩諸賢の情熱溢ふる御教示御支援を辱くし、大過なく一学期高商戦及びインターハイを終へることを得ました。高商戦には各種目に豫科全勝の榮譽を換ふを得ました。

た。

吾等幹部たりし者、終生忘れ得ぬ感激でありませう。

扱て事変第四年目、その影響は吾等の学園、自治の理想郷にも濤々として迫り自治崩壊の時機は正に目前に迫りました。

吾等現在の国家指導者の経て来りし道を踏襲する最後の者として深い感慨に襲はれるのであります。新体制なる語が一つの流行語となり、過去にロマンチズムを基とせる自由主義を説き感激に酔へる者が一朝にして自己の過去の説を信ずる被指導者に現世を説くこともなく冷笑をあげせつつ無責任なる態度にて自己の現状保持に汲々たるも、純なる青年の心には時世とは云へ、決して将来の希望を強め又進取の氣風を増す所以ならずと憂ふ者であります。而れども理由の如何を問はず自治体解消令は吾々をして最後の段階に立たしめたのであります。吾々は自分の意思を殺し、目をつぶり、従はざるを得ないのであります。先輩諸兄よ、吾等の苦衷を明察せられんことを。吾々は過去に餘りにも大なる足跡を残せし、質實剛健の氣風を持つ豫科生のスピリットの源泉たりし團の精神は何等かの形態により残さんといふ念願をもつて居ります。

国家的新体制定るも當豫科にては組織内容未だ何等の決定を見ざる今



秋季高商戦 野球 昭和55年9月28日

日確信なき小生の言を御許し下さらんことを切望して居ります。川口先輩に度々御催促頂き乍ら遅延の旨深く御詫び致します。

(十月十四日記)

高商戦の中止

(昭和十五年十二月発行「応援団々報・第二号」より)

昭和十六年二月六日、開学二十三回記念日式典並びに文武会解散式、続いて全学学徒報国会発会式が行われた。同時に、豫科においては桜星報国会が発会した。桜星会各運動部は修練を目的とする桜星報国会運動班として辛うじて存続が許された。

昭和十六年十月には東条内閣が発足し、対米英開戦は時間の問題であった。同月の兵役改正に伴い教育臨時体制の一環として卒業の半年繰り上げが行われることとなった。そして昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃と米英に対する宣戦布告が行われ、破滅へと連なる悲惨な四年間の戦争が開始されたのである。

応援団が解散廃止され、桜星会各部が桜星報国会各班に改編された後も、高商戦は続行された。もちろん戦時体制下においては昔日の如き華やかさは望むべくもなかったが、高商戦が若人の熱と意気の祭典であることには変わりがなかった。暗く重苦しい時代だからこそ、高商戦は豫科生にとって一筋の光明であったのかもしれない。野球戦には、それまでと同じように両校の生徒が応援を行ったが、応援リーダーには桜星報国会の委員やクラス代表が臨時に当たった。

昭和十八年二月にはガダルカナル島の玉砕、五月にはアッツ島の玉砕と、戦局の悪化に伴い、遂に高商戦の続行すら許されなくなった。

明治四十五年以来の伝統を誇る高商戦は、昭和十七年を最後に中止されるところとなった。

第五章 第四期 昭和二十一年から昭和二十四年まで

概観

敗戦の翌年昭和二十一年秋、北海道帝国大学豫科応援団は復活した。物資も乏しく混乱した時代において、復活した豫科応援団は全てを旧に復することとは出来なかったようであるが、着実に再建の道を歩んだのである。

しかしながら、再建四年目にして学制改革により豫科は廃止されることとなり、昭和二十四年を最後に北大豫科応援団は、その歴史を永遠に閉じたのであった。

豫科応援団復活

昭和二十年八月十五日の敗戦に続いて、かつて日本人が経験したことのない不安と混乱と虚脱感が怒涛のように押し寄せ、教官も学生、生徒も呆然と気抜けしたような月日を過ごしていた。食糧と燃料の欠乏から講義は開店休業といった有様であつた。「学ぶ」ことよりも「生きる」ことが先決問題であつたのだ。

かかる混乱の中においても、大学復興の動きは徐々に高まりを見せていた。昭和二十一年七月には、文武会の流れをくむ全学を一九とした親睦団体である北大全学学友会が生まれた。同年九月には、豫科において桜星会発会に続いて豫科応援団結成が行われた。なお、この年は種々の理由により新学期が秋九月になった為、これら一連の復活再建が秋になったのである。この当時の流れは次のようであつた。

八月三十日 新入生入学

九月 二日 始業式

九月十三日 桜星会発会式

同 応援団結成式

九月二十九日 応援団仙台へ先発

十月一日 野球、蹴球、庭球、仙台へ出発

十月五・六日 インターハイ挙行（於仙台）

十月十七・十八日 対小樽高商戦復活

（昭和二十一年十二月二十日刊「恵迪寮々報」より）

ここに北海道帝国大学豫科応援団は、昭和十五年以来、六年ぶりに復活されたのである。

そして選挙の結果、山口哲雄氏が昭和二十一年度応援団長に就任した。

復活した応援団は、インターハイへの遠征応援そして高商戦応援と、短期間のうちに精力的な活動を展開したのである。

高商戦の復活

桜星会各部、応援団の復活に続いて、昭和二十一年十月十七・十八日には対小樽高商戦が復活挙行された。なお小樽高等商業学校は、戦争中に小樽経済専門学校と改称されていた為、正式には対小樽経専戦（経専戦）であるが、一般的には旧来通り高商戦と呼ばれていたようである。

さて、復活した高商戦は、戦前と同じく若人の熱と感激の祭典であつた。大挙して押し寄せた両校応援団は熱烈な応援を行い、選手も応えて力一杯のプレーを繰り広げた。

ところで、高商戦復活に伴い、戦前では行われていなかった所謂「対面式」が行われるようになった。戦前は、野球戦の開始前にグラウンドで両校の応援団長が握手を交わす程度の交歓はあったようであるが、試合に先立つセレモニーとして行われるようになったのは、この時期である。

この当時の対面式は、近年まで行われていた小樽商大定期戦対面式とは趣をやや異にしているが、やはりその原型ともいえるべきものである。大挙遠征して来る敵応援団を駅頭に出迎え、両校対峙する中で、双方の応援団長が各々「歓迎の辞」「歓迎の辞に応う」を読み上げる。そして応援歌交換、ストーム等を行った後、試合場目指して市中行進に移る。以上が当時の対面式であった。次に昭和二十三年秋の高商戦における高商団長の「歓迎の辞に応う」を掲載する。

春秋流れて何処えか去り吾等貴團を新緑滴る樽都に迎えて半歳今や凋落の秋深まり山野こぞりて紅葉に燃ゆる時吾等また赤き情熱持ちて幌都に赴き貴團に迎えられる 感又一人深からずや「萬物は流転す」とはヘラクレイトスの言なれどその濫觴は遠く大正の古きに溯り三十有余年の歴史と伝統を誇る北大豫科対小樽高商戦も学制改革なる時代の流れに消え去らんとする秋若き吾等が情熱を本日此処に貴團と共に謳歌し新しき時代への喜びと希望を抱きつつ本戦いに永劫の決別を交し得る歓喜又何に喩えんや学生スポーツは学問と共に吾々を育成し社會の有能な行為的主体を形成するをその目的となすものなり

本決戦に臨み吾等が闘魂燃えて既に貴團を呑むの概あり 意気正に軒昂されば鎧袖一触 吾等が雄叫びと感激の歌を聲高らかにエルムの杜に轟かせ石狩原頭に勝利の大ストームを敢行す以上戦に臨み歓迎の辞に應う

昭和二十三年十月九日 緑丘應援團

團長 原 美雄

（以上は二メートル余の巻紙に書かれている）

また当時は、高商戦に先立って挑戦状及び応戦状の応酬が行われた。次に昭和二十三年春の高商戦の際の挑戦状と応戦状を紹介する。

なお昭和二十三年の豫科応援団長は、苫小牧中学校出身、海軍兵学校を経て昭和二十一年に入学・入寮した板谷實氏である。

挑 戦 状

新緑滴るの候 貴團意気愈軒昂の事と存じます

当團一同亦

舊冬の俗塵を去って颯爽の士気正に新であります就ては来る5月二十九

日風光る石狩原頭に貴團を迎へて真執敢闘以て我等若き日の歴史を永劫に意義あらしめ度く存じます
敬愛する貴團がこの熱望に應えて出陣あらんことは我々の信じて疑はぬ處であります
右謹んで挑戦申し上げます。

昭和二十三年五月十一日 豫科應援團長

緑丘團長殿

応戦状

烈々の士氣溢るる挑戦状正に拝受
もとより吾等百鍊の戦士整齊の準備既に全く熱血の闘魂新緑の岡に燃えて決戦に待期仕居候御約定の期日緑滴るエルムの杜に吾等が栄光の旗を押立て大挙撃滅の陣を進むべく候間相望むらくは共に恥じ不る堂々の陣を以て会せられん事を

緑丘應援團長

原 美雄

さて、この時期の応援団の応援振りには戦前よりも大仰なものであったようだ。例えば、市中行進では、都ぞ弥生を一息一音で長々と歌い、それに合わせて一步一步進むので大変な時間を要することもあったようだ。また、団長の出で立ちも、白の柔道着に白袴、黒紋付を着用し、手には戦前から伝来する桜星三条線を配した皮采配を持すという仰々しいものであり、応援中は終始壇上にて不動の姿勢で試合を凝視していたそうである。少々尾籠な話であるが、団長は尿意を催しても壇上から降りる訳にはいかず、已む無く袴の裾から一升瓶を忍び込ませ何とか欲求を満たし得たというエピソードも残っている。

以上の大仰さや仰々しさも、再び来た平和の時代に精一杯青春を謳歌せんとする豫科生の愛すべき稚氣の発露であつたろう。

桜星会との関係

桜星会も応援団と機を同じくして昭和二十一年秋に復活したのであるが、桜星会における応援団の発言力は戦前と同じく強いものであったらしい。特に予算決定に関しては応援団の独壇場の観があつた。従つて、運動部予算を

一銭でも多く獲得しようとする応援団に対して、福利厚生面に力を入れようとする桜星会総務が反発し、時には鋭く対立した。

さて、全学学友会は徐々に衰退する傾向にあった。それと同時に学部別の学生自治会が結成され、桜星会も学生自治会的色彩を濃くしていった。昭和二十三年頃からは桜星自治会とも称するようになり、このような風潮が強まるにつれ桜星会運動部との繋がりも弱くなった。

昭和二十三年には運動部の連合体である「体育会」が非公式に結成されていた様子があるが、昭和二十四年には豫科運動部は桜星会より離れ、この年四月に公式発足した「北海道大学体育会」に所属し新制運動部として新たに発足したのである。

豫科応援団の終焉

学制改革により、豫科は廃止されることとなった。昭和二十四年春には新制大学一期生が入学し、その前年の昭和二十三年に入学した豫科一年生は豫科二年には進級せず新制大学一年へと編入され、豫科生は昭和二十二年に入学した三年生の一学年三百名のみとなってしまった。この豫科三年生が昭和二十五年三月に豫科を修了すると同時に、北海道大学豫科は消滅することとなったのである。

豫科最後の応援団長に和田輝義氏が選出された。また、応援リーダーは豫科三年生の他に、新制大学一年に編入された前豫科一年生の中からも選ばれたようである。この二つの学年は最後の豫科生として結束が固かったらしく、また不本意に新制大学に編入された前豫科生達の中には、それを不満として白線帽を被り続けた者もいたそうである。

さて、昭和二十四年の応援団の活躍も前年と同じく高商戦にインターハイ遠征にと盛大に展開されたのである。そして秋の高商戦を終え、いよいよ豫科応援団解散の時が来たのである。解散を惜しむ声もあったが、豫科と共に歩み、豫科スピリットの旗手であった北大豫科応援団は、母体である北大豫科の消滅により、その使命を終えたのである。解散に当たって、当時の応援団幹部には「新しい時代の新しい応援団が出現する事を期する発展的解消として豫科応援団解散を捉えていこう」という考え方があったようである。しかしながら、母校たる北大豫科と北大豫科応援団の葬送を自らの手で行わなければならない人々の心中は察して猶余りあるものがあつた。

秋の一日、豫科応援団最後の幹部・リーダー達は恵迪寮の一室に集い、ささやかながら万感の想いを込めて解散の式を行った。ここに、熱と意気の揺籃として北大豫科生活に不可欠の存在であった豫科生九百の自治体たる北大豫科応援団は、その伝統と栄光に輝く血涙史を永遠に閉じたのである。

【後編】 北海道大学応援団史

第一章 第一期 昭和26年から昭和30年まで

概観

新制北海道大学発足間もない昭和26年9月、旧制時代の北大豫科対小樽高商定期戦は新たに北海道大学対小樽商科大学定期戦として復活した。この商大戦の為に応援団が結成され、ここに北海道大学応援団が発足した。

団長を選挙で定める制度が始まったが、翌年からは有志幹部・リーダー制となり、昭和30年頃までは「2年生幹部4年制」ともいえるべき形態で活動を行った。

発足とスタイル問題

昭和26年秋、商大戦挙行にあたり、体育会をはじめとする関係者間に応援団結成を要望する声が高まった。当時の市川教養部長も積極的であり、また島学長も大変好意的であった。

応援団長選挙は、教養部学生（一・二年生）の投票によって行われた。クラーク像前での立会演説会、各クラス遊説等が行われ、投票の結果、村岡達郎氏（理類二年）が団長に選出され、次位の森元譲一氏（医進二年）が副団長に就任した。

以上のように、団長、副団長は選挙によって決定されたが、他の幹部やリーダー達は団長、副団長のブレイン的有志であった。

さて、結成された応援団のリーダー内部で所謂応援団スタイルが問題となった。

当時は大学全体が新制大学のあるべき姿を模索していた時期であり、この問題も出るべくして出たものと言えよう。北大の一貫性を説く伝統論、新制と旧制の気質の違いを訴える遺物論等が激しく論議されたが、結論の出ないまま結局は予算や準備期間等の関係により今後とも検討を続けていくということになった。

旧学制が幕を閉じたのは僅か1年半前のことであり、当時の学生気質の中には旧制時代から一貫して続いているスピリットも色濃く存在していた為、今まで通りでよしとする意



定期戦再開 応援状を読み上げる北大・村岡達郎団長

見が大勢を占めたのであろう。

ここで旧制の豫科応援団との継承関係について見てみると、先述したように旧制豫科応援団の最後の幹部は「新しい時代の新しい応援団が出現する事を期する発展的解消」として豫科応援団を葬送したのであるから、とにかく豫科応援団とは異なったスタイルと気風の応援団が出現するべきと考えていた。ところが、学校の制度組織が急激に変革されても学生の気質自体がさほど変化しない以上、新しく出現する応援団も以前と変わりないものが考えられたのである。この両者の新しい応援団に対するビジョンのギャップは、両者の間に「継承関係」を生むことなく、一方的な「模倣」しか生まなかったようである。ともあれ、応援方法を含めた応援スタイルの改革問題は、切迫していない状況下においては保留されることとなり、豫科応援団のスタイルを採用することになったようである。

商大戦復活

昭和26年9月7日、いよいよ商大戦が举行された。当時の新聞に「戦後派は芝居もどき―北大、商大応援団交歓ストーム」という見出しで次の記事が掲載されている。



『北大、小樽商大の秋期定期戦は秋晴れの7日北大競技場を中心に六種目に分かれて栄冠を競ったが、競技に先立って三年振りに復活した復活した応援団が札幌大通八丁目廣場で交歓ストームを行った、この日まず午前九時半約三百名の商大勢が破れ紋付に足駄の團長を先頭に札幌入り、大だいこ、小だいこを打ち鳴らして昔し懐かしい学生の縫衣高下駄に明るい笑いを送れば両校團長は笑いもよそに真面目くさった顔で大げさな握手を交し、北大は豊一枚もある激励文をひろげて読み上げれば、商大も一丈余の巻紙をサット流して激励、かくて応援歌にバン声を張り上げ肩を組んでストームを交歓、十一時から再びたいこを打ちながら街頭行進を行い、競技場でバン声を張り上げた。』

商大戦は、旧制時代と同じく春季と秋季の年2度行われ、第○回春季大会、第○回秋季大会と呼ばれたが、旧制時代と異なるところは「総合性」を重視し、定期戦の参加種目数を明確にして総合優勝制の考え方を取り入れたことである。従って運営方法も、主管校の学長を大会長に推し、両校の関係教官を参与として、両校の体育会（商大では学友会）関係学生を実行委員とする

定期戦実行委員会を設けて運営した。

2年生幹部4年制

応援団結成初年度の昭和26年には全教養部生により応援団長選挙が行われたが、翌昭和27年度以降は団長選挙は行われず、応援団は全くの有志制となっている。

この時期の応援団は2年生幹部4年制とも言えるべき形態であった。応援団活動の主力は1年生2年生の教養部学生であることから、団長、副団長等の幹部は2年生が当たり、学部移行を目途に幹部交代が行われるわけであるが、幹部を退いた3年生4年生も応援リーダーとして参加していた。この形態は昭和30年頃まで続くのであるが、それ以降応援団が恵迪寮に専属化してしまふと全くの2年制へと変わっていくのである。

学生の気質

学制改革により旧制大学は廃せられ、昭和24年4月には新制大学一期生が入学し、昭和25年3月に一学年のみ残っていた旧制豫科三年生が豫科修了して、旧制豫科は永遠に幕を降ろしたのである。しかしながら、学生の気質の変化は、その五、六年後に生じたようである。つまり、昭和24年入学の新制1期から昭和26年位まで入学の学生は旧制の中等教育を受けていた者であり、新制大学に入学しても旧制時代の頃の気風を是とする傾向が強かったように思われる。

しかも、旧帝国大学でありながら内部に旧制高校である豫科を有していた特殊性や、現在は既に存在していないが旧制豫科を彷彿とさせる機構であった「教養部」制度が、大学改革者の意図とは裏腹に、多くの旧制時代の気風を残存させる結果となったのである。

しかし、学生の気質の変化は緩やかながら確実に進んでおり、昭和30年頃を境として本格的なアプレゲール（戦後派）が出現するのである。

第2章 第2期 昭和31年から昭和39年まで

概観

この時期は応援団が恵迪寮に専属化する時期であり、昭和35年頃より現状を打破しようとする試みがなされ、昭和三十五年五月の東京遠征、そして昭和37年の第1回国立七大学総合体育大会（七大戦）の北大での開催などが実現し、昭和40年以降の応援団改革へと続いていくこととなる。

恵迪寮への専属化

昭和29年、応援団は学内公認団体（サークル）として認められ、この年初めて体育会に所属部として加入したが、実際には体育会との関係はほとんど無かったようである。

この時期における応援団の恵迪寮への急速な専属化については、昭和35年度応援団長の阿竹宗彦氏が「應援團史」（昭和53年7月発行）に寄稿して下さった「応援団回顧」から、その実態を見てみよう。

『私が恵迪生活に入った頃（昭和34年）応援団はちょうど一つの転換期を迎えていた。

応援団というクラブ組織は以前からあるにはあったが、いわば恵迪寮が応援団そのものであり、目をむいて組織や体制に奔走する必要がなかった。寮生の中で特に怠慢で、寮歌を愛し、バンカラな者が応援団員であると自他共にゆるし、またそれで良かった。そういう気風を好む者が恵迪寮を慕ってきた時代であった。

応援団が―というより恵迪寮が―扱った年中行事は、春秋の対商大定期戦、春の観桜会、秋の寮祭、水産学部追出し位なものであり、恵迪寮から離れてやることと云えば新入生のための寮歌の紹介だけであつた。しかし、恵迪寮にも次第

に現代イズムが流れ出し、寮生気質も個人主義化、脱個性化してくるにつれ、恵迪寮のアパート化の傾向が目立

ってきた。寮の催しに参加する寮生も次第に少なくなり、自室に閉じこもり、清潔を好み、昔気質のバンカラな行動を嫌う者が多くなった。この様な風潮の中で、一部の者がかたくなに昔気質を振り廻しているのは、むしろ喜劇的でさえある。私が入寮したのはこんな頃である。

しかし、依然として素朴なバリバリズムを好み、寮歌を愛し、恵迪寮と青春を共にしたいという者もかなり居た。彼らはしかしながら、何もしない、というよりは何もできないくせに無理にしようとする応援団には退屈していた。今はなき金山敬一や荒川など、个性的な、一言で云えば旧制高校生タイプの先輩達と、恵迪寮の良い伝統を継いでいくために私は応援団に入り、その改革にとりかかった。』

東京遠征応援

昭和35年、阿竹団長は沈滞した応援団の現状を打破するために、ローマ



昭和35年度団長 阿竹宗彦氏

オリンピックへの出場権を懸けた戸田でのレースに出場するボート部の遠征応援を計画し、5月に実行に移したのである。その経緯経過について、前述の阿竹宗彦氏の「応援団回顧」から続けて引用する。

『恵迪寮即応援団という時代が去った限り、応援団組織の確立が必要であった。組織イントは全員が一丸となつて行動する場を生み出すことである。はつきりとした目的―しかも魅力的な―をもつことである。』

私が初めての応援団東京遠征をおもいたったのはこんな動機からである。ちようどローマオリンピック開催年に当り、東北大と共にオリンピック出場有力候補の双璧といわれていた北大ボート部の応援に東京までかけつけるという計画をねり上げていく内に団員も増え、活動も活発になってきた。初めての合宿を石狩川河岸で行ったが、これには新入生も含めて20人近く参加した。私のねらった通り寮生の興味も高まった。またこれを機に体育会との関係も深まってきた。

体育会と応援団の関係はそれまで殆んど無いと云つて良い状態であつた。だから応援団はいわゆる「応援」をする団体としての価値は体育会にも各部にも余り認められていなかった。それはそれでよいとしても、単なる放歌高吟にふけり、ストームをやり、ボロ衣装をまとい、怠惰を誇りとするバーバリズム団体であつてはならない。パンカラという形で反骨精神をあらわすことだけでその存在価値が認められる時代は過ぎたのだ。そういう意味で体育会との関係を密にするのは良いことだと思う。この東京遠征には体育会も学生会も協力してくれた。予算集めは主として私がやったが、その他の準備には、田畑、滝沢、中野、関、浪江など同僚が頑張ってくれ、団員でない寮生も支援してくれた。

東京遠征には商大定期戦を上廻員が参加した。出発の夜の札幌駅取り上げられたこともあつて、大達が見送りに来てくれた。東大応もこれを機にはじまった。彼等は提供し、歓迎コンパを開くなどのなかつた。その返礼として、春の明大戦の野球の応援にかけつけたボートは東北大に敗れた。しか予算を使って敢行したこの東京遠の応援団の充実につながり、2年合の基盤となつた。』



初の東京遠征 ボートレース応援風景（戸田ボートコース）

る30人の団には、新聞に勢の市民の人援部との接触我々に宿舍を協力を惜しま六大学東大―ものである。し二十万円の征は、その後後の七大戦綜

七 大 戦 の 開 始

昭和35年9月に応援団長の任期を終えた阿竹宗彦氏は、当時の体育会常任委員長からの強い勧誘を受けて体育会常任委員に就任したが、翌昭和36年5月、常任委員長の任期途中での辞任により、そのあとを継いで第15期常任委員長に推戴された。

阿竹委員長は、体育会の組織を強化し、各部に新しい息吹を入れる為には、これまでも剣道部や柔道部など伝統ある部では毎年行われていたが時期や開催場所がまちまちであるために一般の関心も引かず消滅せんとする傾向にあった旧七帝国大学戦（七帝戦）を統合して国立七大学総合体育大会（七大战）とし活発化させるのが最も良いと判断した。

昭和36年8月から各大学の体育会等を訪問して提案を行った。多くの困難はあったが、阿竹委員長の熱誠と卓越した手腕が強い連帯感を生み出し、翌昭和37年3月には七大战の創設が決定され、北大が第一回の主管校となった。

第1回七大战における北大応援団の活躍は目覚ましいものであった。昭和37年度団長吉原照彦氏統率の下に、各部の応援、諸行事、また他大学応援団の接待などに精力的な活動を行い、学内外より高い評価を受けた。

この第1回七大战の時点で応援団が既に存在していた大学は、北大の他には東大（昭和22年創団）と京大（昭和31年創団）のみであったが、これら北大と全くカラーの異なる応援団と接するようになったことは、北大応援団にとって大きな刺激となり、応援団改革への動きに対して拍車をかけることとなった。なお、東北大、名大、阪大、九大の応援団は、七大战開始を機に1、2年中に続々と創団された。

第 五 十 回 商 大 戦

昭和35年の60年反安保闘争を境として学生の気質や生活振りにも一層の変化が生じ、商大战の行事や応援に参加する学生の数が年毎に減少するようになってきた。

そこで、再び商大战の全学的な盛り上がりを実現していく契機として、昭和39年の第50回商大战を盛大に挙行することとした。

昭和39年度団長の氏平増之氏を先頭に、大々的な寄附集めを手始めとして、体育会と協力してポスター、パンフレットの製作、発注を精力的に進め、6月6日には商大战前夜祭ファイヤーストーム、続いて7日には両校対面式、野球応援等が行われることになった。

さて愈々前夜祭ファイヤーストームで第50回商大战の幕は切って落とされたが、学生の集まりが悪く、しかも各部の選手達も来なかった為に至って

低調であり、さっぱり意気が上がりずに終わってしまったようである。

翌日の両校対面式は例年のように盛り上がりを見せ、いざ両校打ち揃って中島球場に野球戦応援に向かおうとした時に雨が降り出してしまい、結局その場で流れ解散のような形になってしまった。

商大戦起死回生の策として大きな期待をかけられていた第50回大会ではあったが、変化していく学生気質と不順な天候には抗することができず不成功に終わってしまった。

これ以降、商大戦は全く低迷し、各部毎の試合が学内の関心も引かぬまま細々と続けられ、ただ「応援団対面式」のみがマスコミによる見世物としての興味に支えられて続行されることとなった。そして、今や実質的な存在価値を喪失した見世物として存続している「応援団対面式」こそが商大戦であるとする錯覚が何時しか当然の如く考えられるようになるのである。この商大戦の暗黒時代の打開は、昭和51年の商大戦再建まで待たねばならない。

応援団改革の方向性

以上のように、この時期は旧制豫科時代から応援団活動の基礎基盤ともいえる存在であった小樽商科大学（旧小樽高等商業学校）との対校定期戦が低迷して精彩を失う一方、新たに生まれた国立七大学総合体育大会（七大戰）が清新な雰囲気の下で伸張していく時期であり、北大応援団にとって根本的な改革は必至となってきたといえる。

その避けがたい改革の方向性について、阿竹宗彦氏は先述した「応援団回顧」の中で次のように述べておられる。

私が体育会の委員長になってから、商大戦、東北大定期戦、地区大会などに積極的に応援団を派遣させるようにした。第1回七大戰開催における応援団の働きはたいしたものだと評価された。しかし私は試合の応援を行なうクラブというだけの応援団にはあきたらなかったし、今でも満足していない。

北大応援団は恵迪寮の分身であるべきだ——というのが私の変わらぬ意思である。

バンカラという名の素朴なバリズム、暮しは低く想いは高く、というワーズワースの精神に通じる伝統ある恵迪生活と切り離してはいけないと信じている。成吉思汗をかこむコンパにおける無茶飲みも、深夜のストームや放歌高吟の無軌道性も、講義に出席せず終日部屋で論議する不規則性も、それだけを取り上げれば非難に価するかも知れないが、このような形であらわれてくる青年の心の奥にある何ものかを育てる力を恵迪寮は持っている。その恵迪寮の良き伝統を受け継いで後々に残すことが、応援団の第一の使命であることを認識して欲しいと思う。

この認識のもとに行動すれば、応援団が男芸者的存在という非難を受けることはない。バンカラという気風を誤解する寮生が多くなっているときくが、その様な誤解を植えつけてはいないだろうか。精神的なものの反映がないバーバリズムはバンカラでなない。寮歌を単にメロディとしてでなく理解し、愛して欲しい。そこには、友情、大志、悲しみに耐える精神、正義、義憤、感動、信頼、その他あらゆる青春の息吹が流れているではないか。

応援団改造論は不必要である。だから我々の時代は全く論じられなかった。はおりはかまの装束が良いかどうか、太鼓の代りに何を使えば良いか、という問題は北大応援団には関係の無いことである。

金をかけることは応援団の充実につながるものでないという理由で、我々は先輩が残してくれたものをそのまま使った。

その古ぼけた衣装が論じられること自体、私には不思議である。最近の応援団は活動範囲が広がっている。

体育会との関係も良いときく。また応援体制も我々の頃よりずっと組織的になっており、嬉しく思っている。時代に即して行動することは決して悪いことではない。ただ、応援の形や姿ばかりにとらわれず、余りに不自然にバーバリズムを強調することなく、昔からひきつがれてきた良い風習・伝統はなるべく残すようにして欲しいと思う。

試合の応援と同時に北大応援団には、他の大学にないこのような重要な使命があると考えたい。その意味で、寮の種々の行事、商大戦は大切にすべくである。諸君の活躍を祈る。

昭和40年から始まった「応援団構造改革」が、その後大きな紆余曲折を経ることを思えば、この阿竹宗彦氏のご意見は真に示唆に富んだものであると深く感じ入る。

第3章 第3期 昭和40年から昭和44年まで

概観

徐々に高まってきた応援団改革への動きは、昭和40年から現実の改革として進められるに至る。その改革は、三年制移行それに続く4年制移行を土台として、それまでの応援団とは気風も応援スタイルも全く異なる新生北大応援団を目指す「応援団構造改革」であった。

ブラスバンド部とリーダー部を擁する新生応援団は昭和42年には一応の完成を見たが、早くも昭和44年には、新生応援団の要とも大前提ともいえるブラスバンド部が分離独立し、更に昭和44年春を以て3年制へ移行し、同時に改革前の和服リーダーが復活することとなった。ここに僅か2年間で新生北大応援団は実質的に瓦解するに至った。

3 年制移行

昭和 39 年 9 月、応援団改革の第一歩として 3 年制への移行が決定された。氏平増之団長をはじめとする昭和 39 年度幹部がそのまま持ち上がって、翌昭和 40 年度幹部（3 年生）を務めたのであるが、幹部内で交替があり、昭和 40 年度団長は藤田正一氏が就任した。

この 3 年制は、2 年生に独自の教養部幹部（団長、参謀、マネージャー）を置くものであり、1 年生と 2 年生による従来の教養部応援団と新たな 3 年生幹部との合作体制の傾向が強いものである。

2 年生の教養部幹部は商大戦を担当し、3 年生幹部は七大戦をはじめとするその他の応援を担当することにはなっていたが判然としない点も多く、昭和 40 年は藤田正一団長が商大戦団長を務めたりもした。

応援団構造改革

昭和 40 年 10 月、藤田正一氏を団長とする昭和四十年年度幹部が引退し、替わって吉川圭一氏を団長とする昭和 41 年度幹部が就任するや、直ちに「応援団構造改革」が決議された。すなわち、羽織・袴・高下駄・蓬髪に象徴される従来の所謂バンカラな応援団スタイルを一切廃止し、学生服・白手袋・軽快なブラス伴奏で象徴されるスマートな応援団スタイルを採ることとし、その重要な前提としてブラスバンドを設置することに決定したのである。

従来の応援スタイルを一切捨て去る不転の決意をもって断行した応援団構造改革であったが、唯一の過渡期的措置として「寮歌部」の設置があった。

寮歌部は、構造改革の結果、リーダー部、ブラスバンド部と並んで団内に設置されたものである。その名称から寮歌普及・振興を専らとするセクションの如き印象を受けるが、実際は他の二部のように専属の団員がいるわけではなくして、

リーダー部の 1 年生と 2 年生が寮歌部員に当たることになっていた。寮歌部活動とは、商大戦に際して 1 年生と 2 年生団員が長髪・羽織・袴・高下駄のいで立ちで両校対面式を行なうことが主たるものである。そして、商大戦の際の 2 年生団長のことを「寮歌（部）長」と呼んだとのことである。

構造改革当初の昭和 41 年 5 月 15 日に札幌で行なわれた商大戦においては、対面式のみ寮歌部の 1 年生 2 年生が羽織袴スタイルで行い、続いての野球応援は全員が学生服・白手袋スタイルでブラスバンド演奏とともに行なうという徹底ぶりであったが、その翌年の商大戦からは野球応援も寮歌部の 1 年生 2 年生が羽織袴スタイルで行なうという具合になり、昭和 44 年には、

商大戦以外の競技

応援においても1年生2年生は羽織袴スタイルで応援するようになっていた。さて、吉川圭一氏を団長とする昭和41年度幹部（3年生）は、そのまま持ち上がって昭和42年度幹部（4年生）となったが、団長は土井興一郎氏に交替した。ここに北大応援団は念願の4年制応援団として確立されたのである。

また、42年11月、前月の10月に新たに昭和43年度団長に就任した千川浩治氏をはじめとする新幹部の下、全学的応援団活動への取り組みの一つとして、北大応援団主催による第1回北大寮歌祭が開催された。

ブラスバンド部の分離

ブラスバンド部が新設されたのは昭和40年十月であるが、翌昭和41年春の商大戦野球戦応援で公式デビューを果し、七大戦にも遠征して応援に大奮闘するとともに七大学応援団ブラスバンド合同演奏にも参加した。

ブラスバンド部は新設以来1年足らずにかなりの実力を有するに至ったが、早くも昭和44年には、音楽性追求を第一義として活動したいという理由により応援団から分離独立を目指す動きが出てきた。

昭和40四年四月の合宿でブラスバンド部分離問題が連日話し合われたが容易に結論が出ず、最終的には昭和44年度団長の吉田務氏の裁断により分離独立が決定した。同年7月に北大主管2度目となる第8回七大戦が開催されたが、既に独立していたブラスバンドは、応援団に協力して応援にパレードに活躍した。

その後同年11月には、新たに「吹奏楽研究部」として学生部公認団体となり、ここに名実共に分離独立が完了した。

第4章 第4期 昭和45年から昭和48年まで

概観

須磨隆氏を団長とする昭和45年度幹部が就任するや、それまでの4年制から3年制への移行、並びに学生服リーダーを基調とする応援スタイルから和服リーダーを基調とする応援スタイルへの転換が決定され、昭和45年4月を以って実行に移された。



3 年制移行と和服リーダー制への転換

北大応援団が四年制応援団として体制を整えてから僅か三年で再び三年制へと移行するとともに、昭和40年秋に応援団構造改革を決議して従来の応援スタイルと基本的に訣別してより四年余りで旧に復するという目まぐるしい移行変りである。

三年制の実施により、須磨隆氏を団長とする幹部は任期半ばの昭和45年春に代替わりを行い、本田彰氏を団長とする昭和40五年度幹部が3年生幹部として就任した。

大学紛争の影響

この時期の応援団活動を考えると、昭和44年に勃発した大学紛争を度外視することは出来ない。数年来くすぶり続けていた学内の諸問題は70年安保闘争と重なって大学紛争という形で爆発し、北大に未曾有の大混乱が生じたのであった。かかる大変動の中であって、果して北大応援団は無風地帯たり得たであろうか。確かに紛争の最中である昭和44年夏には七大戦の主管を成し遂げる等全学的応援団活動を目指す方向性は堅持される一方、昭和44年には寮歌ソノシートを作成し、更に昭和46年度団長柄谷章氏の陣頭指揮の下に計画を練り寮歌15曲を収録したLPレコードを出版するなど地道な努力を積み重ねていたが、応援団が拠って立つべき北大人の心には大きな傷痕が残った。

第5章 第5期 昭和49年から現在まで

概観

木村成二氏を団長とする昭和48年度幹部から4年制移行が提案され、話し合いの結果、昭和49年度は同幹部が持ち上がった4年制へと移行したのである。

4年制による機動力と経験の蓄積を抛り所として、それまでの沈滞を打破して真の全学的応援団を確立するべく、多くの試みが行なわれた。

先達の苦悩に満ちた試行錯誤は結実し、これ以降、北大応援団は一定の安定的発展期に入ったように思われる。

4 年制移行

新制大学が4年制である以上、学生の課外活動は四年制を原則とするのが当然であるのに、北大応援団は何故に斯くも振幅の大きい変遷を辿ったのか。おそらく嘗ての教養部制度が、旧制帝国大学時代の付属高等学校であった

旧制豫科の残像を色濃く想起させるものであった為に、旧制時代の豫科3年と本科3年というイメージが、そのまま教養部2年と学部2年というイメージに重なったのであろう。また、恵迪寮が豫科生の寮からスムーズに教養部生の寮になったことも、そのダブルイメージ化に拍車をかける一助となっている。

その結果、直接的な継承関係こそ無いが、一種の憧憬をもって豫科応援団を模倣した出自を持つ北大応援団は、教養部2年を本籍地とする概念から自由になるのが大変な困難事であったのだと思われる。

いずれにせよ、旧制豫科が消滅してから既に55年余、もはや新制教養部も存在せず、全ては遙か過去の記憶の中に残るのみである。

昭和49年4月、北大応援団は5年振りに再び4年制応援団となり、その後は一貫して4年制を堅持して今日に至っている。

体育会との関係

応援団が全学的応援団への活動を推進していくに伴い、体育会との関係を見直さなければならなくなった。応援団改革期当初から、体育会との協力関係を重視する意見が出されている。応援団が、運動部・体育会・一般学生間にスムーズな交流が生じるように、三者の仲介者的役割を担おうとする構想であり、体育会との関係は応援団出身者または応援団現役の体育会常任委員派遣を一つのベースとして、急速に親密なものになっていったようである。

ところが、全学化への努力が積み重ねられていくに従って、新たなビジョンも現れてきた。まず「恵迪寮専属応援団からの脱却を目指した北大応援団は結果的に体育会（運動競技）専属応援団となってしまっており、北大の大黒柱としての独自の北大全学応援団確立の為に体育会脱退も已む無し」とする体育会脱退論である。確かに、京大応援団は創団間もなく体育会から脱退し、独自の全学応援団のスタンスで競技応援を行なうとともに、学校祭主催への積極的関与等、幅広い活動を展開している。

その後「単に体育会を異質のものとして否定排除することによって所謂全学応援団へと純化させていくのではなく、現実の問題として応援団と体育会との関係におけるメリット・デメリットを直視し、その上で体育会応援団という要素を内包した全学的応援団となるか否かを決すべき」というビジョンも示されたが、体育会との関係は膠着状態にあったようである。

一つの現象として、昭和37年の阿竹宗彦氏以来絶えることの無かった応援団出身の体育会常任委員幹部が、昭和44年の中司哲雄氏を最後として昭和48年の安藤俊春氏まで途絶えていたという事実がある。

昭和49年の4年制移行を契機として全学化への活動強化を行おうとした時、体育会問題の解決は避けて通れないものとなった。

梶井浩氏を団長とする昭和50年度幹部は、昭和50年5月に体育会との話し合いを開始したが、両者の間に横たわっていた偏見や不信は問題の解決を著しく妨げた。

昭和50年10月、谷口哲也を団長とする昭和51年度幹部が就任するや、さっそく話し合いが再開された。両者の根気強い努力により多くの合意点を見出すに至り、同年12月10日、遂に両者の不退転の決意を示すものとして「応援団・体育会本部共同声明」を広く北大全学に発表した。

その共同声明の内容は「北大スポーツ界の更なる発展と充実を目指し、体育会規約第10条第5項の精神に則り、北大応援団と体育会本部は以下の諸点を取り決めることを、ここに表明する」という書き起こしで、「諸競技試合への動員情宣」「体育会活動に対する一般会員（学生）の関心を高めるための情宣活動」「商大戦の運営」「応援団の関与する体育会主

催行事（オリエンテーション・合同壮行会・運動会・合同送別会）」「各運動部に対する応援・支援（競技試合応援・壮行会・差し入れ等）」における「協力と分担システムの確立」および「明確化」を取り決めている。そして、以上の諸点を円滑に実現し実行していく為に、恒常的な協議の場（仮称・応援団体育会連絡協議会）の設置を定めている。

ちなみに、体育会規約第10条第5項とは、第10条（運動部、応援団の任務）の中で応援団のみに規定された条項であり、「5、応援団は第4条の事業を応援するものとする。」という内容である。

以上の共同声明発表に至るまでの過程で、応援団と体育会それぞれの目標・活動の相違が明確にされた。応援団の目標は「校風意気の発揚」であり、その目標を実現していく活動は「北大における学生生活に対して、様々な場において、有形無形の応援を行う」ことである。一方、体育会の目標は「体育の向上、スポーツの振興」であり、その目標を実現していく活動は「学内運動競技大会の実施、定期戦の実施、運動部に対する便宜」を行うことである。この相違を踏まえたうえでの両者の協力関係が模索された。

これ以降、いささかの紆余曲折はあったが、関係者の不断の努力もあり、体育会との関係は概ね良好な状態が続いている。

商大戦の再建

体育会問題と並んで商大戦再建も応援団改革期当初からの懸案であった。対校定期戦としての商大戦は実質的に崩壊しており、七大戦や地区体等の陰

で各部レベルの交流試合程度のもとなっていた。そして、かつての対校定期戦の「擬制」に過ぎぬ両校応援団対面式のみが、一種の見世物として続けられているに過ぎなかった。

昭和50年5月、北大体育会と北大応援団の双方から小樽商大体育会に対して商大戦の総合対校戦化の提案がなされ、快諾を得た。

ただ年度途中の為に本格的な予算を組むことが出来ず、小樽で行われる通算61回目の商大戦で先ずは先鞭をつけることに全力を尽くすこととした。

第61回大会実行委員会が発足し、大会長には主管校の学長である実方正雄小樽商科大学学長、副大会長には今村成和北海道大学学長を推戴した。参与には両校学生部長を推戴し、実行委員長に成瀬栄一商大体育会会長、副実行委員長に福井尚登北大体育会常任委員長が当たることとなった。実行委員は両校の体育会委員並びに応援団員による総勢11名であった。

昭和50年6月15日の野球戦当日、短期間ではあったが精力的な宣伝活動の甲斐があつて、200名に近い学生が札幌駅に集まった。

小樽駅に定刻に着き、対面式会場である小樽東映前に予定通り到着した。しかしながら、商大勢が今回の商大戦（彼らにとっては北大戦）再建の意義や趣旨を充分咀嚼しきれなかったためか、定刻を大幅に遅れて到着し、更には実行委員会から対面式時間の短縮を申し入れたにも拘らず従前どおりの3時間にも及ぶ冗長な進行振りであり、その結果として野球戦開始に間に合わないという大失態を演じ大いに問題を残した。

翌昭和61年6月、再建第2回目である第62回商大戦が札幌で行われた。準備は3月から始められ、予算も両校合わせて20万円を確保することが出来た。応援団は宣伝活動を担当することになり、応援団からの実行委員である昭和51年度幹部の中紙麦平氏、同じく高橋勲氏が陣頭指揮を行ない、組織的宣伝活動を展開した。一方、1年生2年生団員による商大戦応援団の团长斉藤憲一氏を先頭に、選手激励、壮行会、競技応援等を活発に行った。

6月18日の昼休みには、教養部の中講堂前においてラグビー部と野球部の壮行会が行われ、続いて北大ラグビー場でラグビー戦応援が行われた。

翌6月19日は、待望の野球戦である。北大勢は北大教養部前を出発し、駅前通を行進して中島球場へと向かった。先頭には斉藤憲一商大戦応援団团长、続いて梅津邦夫副团长、更に濱田康団旗長、山内茂鼓手長が歩武堂々と進む。

一方、札幌駅頭で出迎えた参謀の千原治氏が白装束も清清しく先導して、総勢三百の商大応援団も内藤克団团长を先頭に応援歌・進軍歌を高唱しつつ球場へ向かう。

さて野球戦に先立って、中島球場横広場にて両校の対面式が行われた。千

原参謀の司会により式は開始され、まずは両校校歌の交換、そして花束贈呈へと続く。次に、対面式のメインである挑戦状、応戦状の応酬が行われた。商大内藤団長による重厚な挑戦の辞に対して、北大斉藤団長は意気溢れる応戦の辞を述べ、邀撃の意を示した。引き続いて、対面式に彩りを添える演舞披露が行われ、商大は雲龍型の拍手、胡蝶の舞、そして女装団員による南蛮踊り、北大は風流舞、そしてユーモラスな泥棒踊りが、定式通り披露された。両校団旗長による団旗エールの後、両校寮歌の交歓をもって式を終了し、双方とも意気高らかに中島球場に乗り込んだ。

一塁側スタンドに陣取る北大応援団500名、三塁側スタンドに陣取る商大応援団300。

ホームベースにおける両校応援団幹部の交礼握手の後、北大勢は全員起立しリーダーの振る旗にあわせて厳粛に校歌を斉唱し北大スタンド前に整列する選手を激励した。大会長である今村北大学長の始球式によって試合は開始したが、北大の応援は猛烈であった。リーダー達の音頭に合わせて総勢500の北大応援団が「ワッショイ、ワッショイ」と熱狂した。中盤になって北大が得点する度にグラウンドになだれ込んでストーム。回が替わる度に寮歌高唱。そして、商大戦名物の野次の応酬。遂に迎えた勝利の瞬間「ウオー」という雄叫びとともに、北大生全員がグラウンドへ飛び出して感激の戦勝ストームを行った。興奮の坩堝の後、選手を称える優勝歌「桑榆哺紅に」が中島球場に静かに力強く流れた。

以上のように、永らくの懸案であった商大戦の総合対校戦としての再建への第一歩が踏み出された。昭和51年度団長として再建に携わった筆者は、当時「これで商大戦も、あと20年は何とかなるな」と幹部の皆で話したことを覚えている。

その後、両校関係者のご努力により商大戦は順調に開催されたが、前述の筆者の感慨が皮肉なこと到的中する結果となり、再建の昭和51年から23年後の平成11年をもって商大戦の両校応援は中断している。これについては、本稿の最後に言及する。

北大百年祝賀前夜祭

昭和51年、北海道大学は創基百周年を迎えた。明治九年に札幌農学校として学府の基が建てられてより一世紀の記念すべき年を迎えたのである。大学主催の記念行事が計画されたが、大学の主体たるべき学生、そして先達である同窓生、更には北大と共に歩んで下さった市民など、北大百年を寿がんとする者が誰でも自由に参加出来る催しは皆無であった。そこで、昭和51年度応援団長の谷口哲也が発案させていただき、応援団として「北大百

年祝賀前夜祭」を發起することとした。その催しの性質上、学生・教官・同窓生有志によつて幅広く構成される実行委員会を設置することとし、学内外に広く呼びかけたところ多くの賛同を得ることが出来、昭和51年2月23日には第一回の実行委員会を開催した。

大会長には星光一北大名誉教授が、実行委員長には矢島武北大名誉教授が、それぞれ正式に推戴され、事務局長には团长谷口哲也が就任することとなった。また、前夜祭の内容は、第一部を「百年記念寮歌祭」とし、第二部を「提燈行列」とすることに決定した。

なお実行委員会をお引き受けくださった方々は次の通りである。

松野正彦先生（医学部）
小池東一郎先生（工学部）
安井 勉先生（農学部）
山元周行先生（理学部）
青山和夫先生（工学部）
山嶋正男先生（法学部）
水野 一先生（文学部）
板谷 實氏（同窓生）
阿澄昌夫氏（同窓生）
水野俊男氏（学生）
浜田 康氏（学生）
竹中秀行氏（学生）
増元照明氏（学生）



さて、実行委員会をお引き受け下さった方々の御尽力により準備は着実に進んでいった。
大学側は当初は半信半疑のようであったが、菅原学生部長の御助力もあり、途中から公式行事の関連行事として協賛する旨の申し出があり、欣然受諾した。

昭和51年9月14日当日は朝から生憎の雨降りであったが、寮歌祭会場である北大体育館には続々と参加者が集まり、開会の午後5時には学生と同窓生で満員となった。

ロビーには北大創基百年を記念する特別銘柄清酒「都ぞ弥生」の大樽酒が据えられ、参加者に振舞われた。寮歌祭は盛大に挙行され、後から後から詰め掛ける人達で席が足りなくなってしまうほどであった。

寮歌祭に続いて提燈行列参加者があった。行列の先頭が北大正門に達した時、00人以上の提燈行列参加者があった。

未だ最後尾が理学部（現在総合博物館）前を通過していなかったほどである。提燈行列は寮歌を高唱しつつ駅前通りを南下して大通公園まで行われた。最後は大通公園四丁目に集合して大ストームが行われ、都ぞ弥生の大合唱のうちに幕を下したのであった。

この前夜祭の盛況振りを見た時、北大スピリットが未だ脈々として伝わっていることを痛感した。また同時に、かかる北大スピリットの旗手たるべき北大応援団の責任の重さに襟を正す思いであった。

ブラスバンド問題、再び

応援団構造改革の一環として昭和40年10月に新設されたブラスバンド部が、昭和44年4月、音楽性追求を第一義として活動したいという理由により応援団から分離独立し、同年11月には、新たに「吹奏楽研究部」として学生部公認団体となったことは前述した。

その後、同部は「北大吹奏楽部」と称し、平成15年には「北大連合吹奏楽団」と改称して今日に至っているが、一貫して「旧友」としての友好関係を保ち、北大主管の七大戦や諸行事、野球応援の際に駆けつけてくれることも多かった。

さて、高田和重氏を団長とする昭和57年度幹部が就任するや、活動綱領に専属ブラスバンド隊の結成を掲げた。この部隊は応援団専属（付属）の「助っ人的な組織」である

と規定している。昭和57年5月22日からの北海道六大学野球リーグ戦までに結成が間に合ったとのことであり、同年12月の時点での隊員数は女性1名を含む八名であった。

た。なお翌昭和58年11月には女性四名を含む隊員14名と増加している。青木崇氏を団長とする昭和59年度幹部は、昭和58年10月の就任時に、応援団内に新たにブラスバンド部を設立する方針を示した。その理由は、専属ブラスバンド隊をそれまで以上に各種応援や壮行会に用いて行きたいが、所詮応援団親派の集まりに過ぎず、応援団員ではない彼らに更なる活動は強要出来ないから、団内にブラスバンド部を新設するというものである。なお、専属ブラスバンド隊は応援団ブラスバンド部が形を成すまでの橋渡し役として今まで通り活動してもらおうとともに、女子ブラスバンド部員の受け入れ体制が現状では不充分であることから、その

受け皿となつてもらおうという構想であり、明春から始める応援団ブラスバンド部員募集に際しては、入部希望者のうち女性は専属ブラスバンド隊に所属してもらおうとしている。

ところが一方、専属ブラスバンド隊有志十名の連署により「現在の専属ブ

ラスバンド隊員1、2年目を女子も含め速やかに団に統合する」旨の要求書が提出され、応援団が考えていた以上に専属blasバンド隊は組織的にも精神的にも発展しており、既に応援団内blasバンド部を目指して動き始めていたことを初めて認識した。

この方針を巡って応援団と専属blasバンド隊との合同会議が数次にわたって持たれたが、結論としては、昭和59年4月から応援団blasバンド部（男子部員のみ）を新設し部員募集を行う、一方専属blasバンド隊は専属吹奏楽部と改称し女子部員を含む部員の募集を行う、そして応援団blasバンド部の完成をもって専属吹奏楽部は解散するというものであった。

ところが、応援団blasバンド部には一名の応募も無く、実質的にblasバンド部は成立しなかった。

昭和59年8月、馬場修三氏を団長とする昭和60年度幹部が就任し、10月13日に専属吹奏楽部との話し合いが持たれた。

その後団内で検討が重ねられたが、結果的には専属吹奏楽部は分離独立し、12月3日に「北海道大学競技応援吹奏団」が発足した。

発足時の吹奏団員数は不明だが、1年後の昭和60年12月現在の団員数は保野直美団長以下10名である。

昭和61年1月に「北海道大学応援吹奏団」と改称したが、各競技応援や諸行事で応援団と共に活動するほか、体育会行事や学校祭行事等に幅広く活躍している。

その後、学生部公認団体となり体育会所属団体となった。団員数は平成4年の19名を最高として常に10名を超えていたが、何故か平成6年を境として一桁の団員数となり今日に至っている。

かつて応援団から分離独立した「北大吹奏楽部」とは「旧友」として友好関係を保ったが、また新たに分離独立した「北大応援吹奏団」とは「同志」として北大の校風意気の発揚に力を合わせている。

応援団OB会の設立

北大応援団のOB会については、昭和41年3月19日、在学中の応援団OBによるOB会設立に関する談話会がもたれた。

「応援団の変貌しつつある此の時に、応援団の素晴しさを身を以って体験した卒団者を自負する我々でOB会なるものをつくり、旧交を暖め合うとともに現役団員とも接触を持つのではないか」との主旨の下に、取り敢えず在学中の卒団者によるOB会「延齢会」が設けられる運びとなった。会長に諏訪正明氏（昭和38年）、副会長に保田勝範氏（昭和38年）、会計に丸山典弘氏（昭和39年）が就かれた。そして、6月には会誌「延齢」創刊号が出

された。

同年11月5日に開かれた延齢会総会において「延齢会が発展して現在の応援団の卒団者会となるべきである」という意見が大勢を占めた。そこで、延齢会と応援団現役との話し合いが行われた結果、延齢会を正式な卒団者会（OB会）とすることが確認され、ここに北海道大学応援団卒団者会「延齢会」が発足した。

昭和45年頃までは延齢会の活動は活発であったが、その後、活動の中心であった会員の異動などの理由により停滞し、実質的に休止状態となっていたのである。

さて、それから十年後の昭和55年11月29日に開催された北海道大学応援第70代記念パーティーの席上、応援団OB会の体制強化をすべきという意見が賛同を得た。

その場で準備会の事務局長的役割を仰せつかった筆者は、現在その活動が一段落している地元北海道のOB会を再建すると共に、近年活発な活動を行っている本州各地のOBとの連帯を深め、近い将来には全国のOBをカバーする全国連合OB会を発足させたいと考え、各地の中心的OBに連絡を取らせていただいた。

しかしながら、特に本州各地のOBを中心として、今回の試みについての手順・手続き、そして時期が不適切であるというご助言やご叱責をいただき、小休止する次第となった。

それから4年後の昭和59年7月、あらためて筆者から北海道在住OBの親睦会の設立を提案したところ、多くのOBのご賛同を頂戴し、9月29日に設立発起人会結成会が開かれた。当日は、横山清氏（昭和32年）、高井宗宏氏（昭和32年）、熊谷治夫氏（昭和54年）、山田淳氏（昭和57年）、太田英明氏（昭和59年）の諸氏が出席し、この際一挙に北海道地区OB会を発足させる

べきではないかという結論が出た。

準備段階で、設立総会会場の手配をはじめとする様々な便宜を計って下さった横山清氏と、発起人会の会場や仮連絡先として研究室を提供して下さった高井宗宏氏の両先輩の御尽力により、短期間で設立に漕ぎ着けることが出来た。

昭和59年11月2日、北海道大学応援団・北海道地区OB会設立総会が開催された。出席されたOBは25名で、年齢は70代から20代までの多彩な顔触れであった。

まず会の名称を、北大応援団OB会の名称として由緒があり他地区のOB会の名称とも相通ずるものとして「北海道延齢会」と決定した。続いて審議

決定された会規約は、会の精神に沿って簡素を旨とし、次の5条のみ。

第一条 本会は北海道延齢会と称する。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、併せて北海道大学応援団の後援をはかることを目的とする。

第三条 本会は北海道帝国大学豫科応援団並びに北海道大学応援団に在籍した者、及びその関係者をもつて構成する。

第四条 本会は会運営のために必要な役員を置く。

第五条 本会の経費は会費、寄附金、その他の収入をもつてあてる。

また、選出された役員は次の通りである。

(順不同、敬称略)

名誉会長	大原久友（昭和7年）
会長	山本武（昭和14年）
副会長	板谷實（昭和23年）
副会長	諏訪正明（昭和38年）
幹事長	横山清（昭和32年）
幹事	高井宗宏（昭和32年）
幹事	氏平増之（昭和39年）
幹事	熊谷治夫（昭和54年）
幹事	山田淳（昭和57年）
幹事	青木崇（昭和59年）
幹事	太田英明（昭和59年）
事務局長	谷口哲也（昭和51年）

これ以降、毎年秋に定期総会を開催し、昭和63年からは春季親睦会（後に夏季親睦会となる）としてビール会を開催した。

また、昭和44年から20年間にわたり北大応援団顧問を務めていただいた山元周行先生が翌春に定年退官なされることから、昭和63年11月2日、北海道延齢会が主催して「山元先生に感謝する会」が開かれたが、当日の出席者50名、先生に贈呈する感謝の記念品に賛同して下さった方は更に73名にも及び、名残尽きぬ盛大な宴となった。

現在、北海道延齢会は設立から22年を経た。初代役員のうち、大原久友名誉会長、山本武会長は幽冥境を異にして既に久しくなったが、他の役員は健在であり、若手の幹事を順次加えて活動している。なお、現在の役員は次

の通りである。（順不同、敬称略）

顧問	山元周行
会長	板谷 實（昭和23年）
副会長	横山 清（昭和32年）
副会長	諏訪正明（昭和38年）
幹事長	高井宗宏（昭和32年）
副幹事長	氏平増之（昭和39年）
幹事	千原 治（昭和53年）
幹事	熊谷治夫（昭和54年）
幹事	森重正也（昭和54年）
幹事	高橋浩志（昭和55年）
幹事	渋谷正志（昭和56年）
幹事	村田 勝（昭和60年）
幹事	藤原伸也（平成13年）
事務局長	谷口哲也（昭和51年）

応援団員の減少

本概史の最後に、今日の応援団で深刻となっている問題を二つ取り上げる。

まず、その一つが応援団員の減少である。

新制北海道大学応援団の各年度の幹部の人数をまとめると次の表のようになる。

（ ）の付いているものは前年度幹部留任昭和四十年の応援団改革期以降、応

昭和 2 6 年	昭和 2 7 年	昭和 2 8 年	昭和 2 9 年	昭和 3 0 年
1 4 名	8 名	(8 名)	1 2 名	9 名
昭和 3 1 年	昭和 3 2 年	昭和 3 3 年	昭和 3 4 年	昭和 3 5 年
6 名	1 2 名	1 3 名	1 8 名	1 9 名
昭和 3 6 年	昭和 3 7 年	昭和 3 8 年	昭和 3 9 年	昭和 4 0 年
1 8 名	7 名	1 0 名	1 0 名	(1 0 名)
昭和 4 1 年	昭和 4 2 年	昭和 4 3 年	昭和 4 4 年	昭和 4 5 年
6 名	(6 名)	7 名	5 名	6 ・ 8 名
昭和 4 6 年	昭和 4 7 年	昭和 4 8 年	昭和 4 9 年	昭和 5 0 年
八 名	七 名	五 名	(5 名)	6 名
昭和 5 1 年	昭和 5 2 年	昭和 5 3 年	昭和 5 4 年	昭和 5 5 年
9 名	7 名	5 名	7 名	7 名
昭和 5 6 年	昭和 5 7 年	昭和 5 8 年	昭和 5 9 年	昭和 6 0 年
9 名	5 名	7 名	4 名	7 名
昭和 6 1 年	昭和 6 2 年	昭和 6 3 年	平成 元 年	平成 2 年
9 名	6 名	2 名	3 名	1 名
平成 3 年	平成 4 年	平成 5 年	平成 6 年	平成 7 年
5 名	3 名	4 名	5 名	4 名
平成 8 年	平成 9 年	平成 1 0 年	平成 1 1 年	平成 1 2 年
6 名	2 名	2 名	2 名	1 名
平成 1 3 年	平成 1 4 年	平成 1 5 年	平成 1 6 年	平成 1 7 年
3 名	2 名	2 名	(2 名)	3 名

援団の各学年の人数は概ね5名から10名の間であり、新学期に4学年揃うと20名を超える団員数となった。

しかしながら、昭和末年頃より各学年の人数が急激に減少し概ね5名に満たない人数であり、更には平成九年以降の各学年の人数は多くても3名という状態である。これでは、4学年揃っても20人に満たないばかりか、近年は総勢10名に満たない状態が慢性化している。

かかる状況では、如何に一騎当千の意気を持つ応援団員とはいえ人手不足は否めず、自ずと日常活動も縮小傾向とならざるを得ない。

新入団員の勧誘に力を入れているが、入団しても短期間でさっさと退団していくそうである。

後述するが、旧制時代からの好敵手である小樽商大の応援団は入団者が途絶えて、遂に平成9年で実質的に霧散してしまった。北大応援団の現状を直視すると、商大応援団の消滅は決して他人事ではないのである。

ちなみに、東北大学応援団も嘗ては偉容を誇ったが、団員不在から遂に消滅した。その後、女性団員（団長）1名が入団して応援団再興の夢を追っているという現状である。

商大戦両校応援の中断

明治45年に始まった高商戦を引き継ぎ続行されてきた商大戦も様々な紆余曲折を経たが、昭和51年の第62回大会で総合対校戦として再建されてからは順調に回を重ねていた。

年号は昭和から平成へと移ったが、商大戦は応援団や体育会など関係者の努力によって年々充実した内容となっていた。

札幌と小樽で交互に開催され、両校対面式と野球試合等の応援が両校学生動員のもとで行われた。かつては冗長な見世物として肥大化した対面式は、それまでの様式を引き継ぎながらもすっきりとしたものとなり、総合対校戦の両校対面式に相応しいイベントとして確立された。また商大戦期間中は、定期戦の雰囲気盛り上げるために、「オセロ対決」や「カレー対決」「相撲対決」という企画も実施

されたり、一般学生の参加するドッジボールや玉入れも実施され、それぞれ成功していた。

しかし、終焉は突然やってきた。平成9年冬、小樽商大応援団が突然活動



最後の商大野球戦応援 エールを送る藤原伸也参謀

の休止を発表した。その理由は「団員不足の為」とのこと。

実は、この平成9年の商大戦の際の商大応援団は現役団員が1名のみであり、在学中の応援団OB（3，4年生）に臨時で再登板願って両校対面式や試合応援を実施していたのであるが、このOB達が卒業することとなり遂に休団せざるを得なくなったのである。



翌平成10年春の商大戦までには新入団員を確保して活動を再開しようとの努力は行われたようである。また北大応援団も度々小樽商大を訪れて商大応援団唯一の団員である小原団長と存続について話し合いを重ねた。

だが残念ながら小樽商大応援団は復活しなかった。明確に記述された資料は見当たらないが当時の応援団在団者に確認したところ、平成10年は両校対面式をはじめとする総合対校戦としての行事および両校学生による試合応援は無かったことである。

明くる平成11年、小樽商大応援団は商大戦（北大戦）に向けて一時的に復活した。つまり平成9年度の小樽商大応援団団長であった小原氏（4年生）が唯一人の応援団員として再登場してくれたのである。しかし、この年の商大戦は総合対校戦という形ではなく、6月19日に小樽の桜ヶ丘球場で行われる硬式野球戦の応援のみを学内に案内した。両校対面式は球場内で野球応援に先立って行われた。この平成11年度の第85回商大戦に商大戦応援団幹部として出陣した藤原伸也氏（平成13年度団長）が貴重な写真とともに次の一文を寄せてくれたので紹介する。

私が二年目の頃の商大戦の写真を数枚送付いたします。当時は商大側が主管で行われましたので、我々が北大（クラーク像前）を出発し途中ストームを交えつつ小樽まで向かいました。私達是对面式を行いました、あくまでもメインは対面式後の野球応援としました。

商大応援団側も一人しかいないということ（私達は何とか説得しましたが叶わず）応援状、挑戦状はなく、参謀エールと野球応援後の団旗エールがころうじて出来ました。

商大応援団の写真は残ってませんでした。

私が引退後も商大の応援団が「正式に」復活したという話は聞きません。残念ながら、もしかすると、もはや応援団を伝える人間自体が商大にいないかもしれません。何とか復活を願ひはすれど難しい現状です。

かくして総合対校戦としての商大戦は平成11年度の第85回大会を最後として中断してしまい、各部毎の定期試合となっている。

我が北大応援団の淵源は旧制豫科応援団に求められるが、独自のカラーを直接育んできたのは総合対校戦としての商大戦であったと確信している。北大応援団カラーの揺籃であり、そのカラーを再生産するエネルギーの供給源である商大戦を失ったことの結果は、そう遠くない将来に顕在化してくるであらう。

最後に

「青春興亡の百年」と題して札幌農学校時代から北海道大学に至るまでの「応援団」の沿革を概ね述べてきた。あらためて全文に目を通してみると、本当に色々な出来事があったと思う。

どの時代においても応援団の目指すものが校風意気の発揚であるならば、その時代その時代の社会潮流とは無縁ではあり得ず、応援団は思潮に敏感に反映しながら歩みを継いできたのである。そういう意味で応援団の歴史は、まさしく各時代を楡影の学園で過ごした若人の青春の興亡史そのものである。

しかし今日まで応援団は積極的に自らの歩みを外部に語ってこなかった。内部の葛藤や懊悩は他者へは見せず、ゆったりと鷹揚に構えてみせて豪快にバンカラに振舞ってきた。

昭和53年7月に発行された「應援團史」も応援団内部で応援団の在り方と将来を論じるときに道標として編纂されたものであった。だが時は移り変わり、今日の北大応援団はその存亡にも係わる深刻な団員不足に直面し、永年の好敵手であった小樽商大応援団が同じ団員不足という原因から遂に消滅してしまい商大戦も総合対校戦としての面影は最早無い。

今こそ応援団は自らの沿革を含めた等身大の姿を対外的に明らかにし、理解と協力を得なければならぬ時期である。

この時に、北大応援団にとっても魂の故郷である恵迪寮の同窓会誌に紹介記事を掲載させていただくという好機を頂いたことに深く感謝する。

今年から6年後の平成24年は初めて高商戦応援が行われたことにより応援団発祥の年とされる明治45年から百年目の年である。果たして、その時に北大応援団はどのようなになっているのであろうか。

以上



応援団の下大合唱